

幼児期における文字の書き指導に関する一考察

— 長崎市の幼稚園への実態調査に基づいて —

岡本 明博

A Study of the Teaching of Writing in Early Childhood :
Based on the Survey at the Kindergartens in Nagasaki city

Akihiro Okamoto

要 旨

多くの幼児たちは、小学校に入学する頃にはある程度の平仮名書きを習得している。しかし、幼稚園教育要領では直接的な文字の書き指導は小学校に入学してから行うことになっており、就学前の幼児期の文字の書き指導については、組織的な指導が行われていない。本研究では、現行の幼稚園教育要領における文字指導と比較しながら、幼稚園における文字の書き指導の実態を明らかにすることを目的とした。長崎市の幼稚園全49園に文字の書き指導の調査を行ったところ、「平仮名」を中心とした文字の書き指導を行っている実態が明らかになった。指導の方法として、「なぞり書き」、「筆順」が多く行われていた。指導上の問題点としては、幼児の「個人差」や「鉛筆の持ち方」への対応が示された。

キーワード：文字の書き指導、幼児期、実態調査、幼稚園教育要領

1. はじめに

多くの幼児が就学前から文字の読み書きに興味を示しており、幼児期は、家庭や幼稚園等での遊びの中でそれらを習得し始める重要な時期である。

しかし、現行の幼稚園教育要領の規定では、直接的な文字の指導は小学校に入学してから行うことが前提となっており、就学前の幼児期の文字の指導については、具体的に示されていない。著者が長崎市内の幼稚園での文字の読み書き指導の様子をみる限り、幾つかの幼稚園で文字の書き指導が行われており、その指導のあり方は一様でなく幼稚園によってばらつきがあると思われる。

また、巢立・和田(2014)は、小学生以上の筆記具の持ち方について、望ましい持ち方をしている児

童が1クラスの3分の1にも満たない現状があり矯正も難しいと述べ、新井(2013)は、小学1年生の中に、望ましい基本姿勢や鉛筆の持ち方をしていない児童や、文字を構成する要素を書く作業に困難を示す児童が見られたことを指摘している。

大庭(2003)は、小学校に入学する前の幼稚園年長組の幼児と小学1年生の児童を対象に、就学前後の書字に関する調査をしたところ、幼児期には、読み書きの学習を組織的に行うわけではないため、誤った字形を学習してしまい、書字時に誤字を書く様子が頻繁に観察され、幼児期にはこのような誤字が厳密に修正されることはほとんどなく、小学校に入学するころには、それらの誤字が定着していることも少なくないとしている。

齋木・市原(2007)は、多くの幼児が小学校入学

以前に読み書きができるという報告がなされていることから、平仮名の読み書きに関しても、就学前教育との接続、連携が重要になっているが、そこには次の問題点があることを指摘している。

- ① 幼児期に早くから文字に興味を示し、書き始めた幼児は、姿勢・執筆・筆順など自己流に覚えてしまうことが多く、その結果小学校で矯正されるか、またはされずそのままの場合がある。
- ② 幼児期に文字に関心を示さなかった幼児は、小学校で個別学習や家庭での指導がある程度必要となる。
- ③ 文字指導に関する幼児の身体的発達をふまえた配慮が十分でない。

これら問題点を改善するためには、幼児が文字を習得し始める幼児期から系統的な文字指導の視点をふまえた配慮が必要であると思われる。

巢立・和田（2014）が実施した幼稚園、保育園の保育者を対象にした文字指導の調査では、保育者が小学校入学前の文字の読み書き指導に肯定的かつ積極的であること、多くの幼稚園、保育園で行われていた文字の書きの指導は、筆記具の持ち方、書く時の姿勢であり、主な書き指導の種類は平仮名であることがわかった。

しかしながら、この調査は、保育者の就学前の文字指導に関する価値観や文字の書き指導の種類について検討したものであり、具体的な文字の書き指導のあり方や、実際に幼児に指導する際の問題点や改善点を検討した研究ではなかった。幼児期における文字の書き指導の実態を把握するためには、文字の書き指導の種類に加え、指導内容やその問題点についても検討する必要がある。

そこで、本研究では、日本の幼稚園教育では文字の取り扱いについてどのように考えているのか、現行の幼稚園教育要領から読み取るとともに、幼児期の文字の書き指導について実態を把握するために幼稚園に対して調査を行い、文字の書き指導の種類、指導内容や指導上の問題点について明らかにすることを目的とした。

2. 幼稚園教育要領における文字の取扱い方

現在の幼稚園において文字の書き指導に関する実態調査を実施するに当たり、現行の幼稚園教育要領において、文字とのかかわり方をどのように捉えているのかを確認しておきたい。なお、日本の幼稚園教育における文字学習について、どのように考えてきたのか、捉え方の変遷についてもふれることは重要であるが、本研究では幼稚園教育要領等における歴史的経緯についてはふれるものではない。

- (1) 「身近な環境とのかかわりに関する領域『環境』」
「身近な環境とのかかわりに関する領域『環境』」の(3)には次の「ねらい」が示されている。

(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、**文字**などに対する感覚を豊かにする。

さらに「環境」の領域の「内容」及び「内容の取扱い」には次のようにある。

「内容」
(9) 日常生活の中で簡単な標識や**文字**などに関心をもつ。
「内容の取扱い」
(4) 数量や**文字**などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や**文字**などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

ここでは「文字」という文言が使われ、取り扱いが示されている。幼稚園教育では文字に関して、まず「幼児自身の必要感に基づく体験を大切にすること」、「興味や関心、感覚が養われるようにすること」を求めている。

「幼稚園教育要領解説」の「内容」(9)に関する解説には、「幼児が文字を道具として使いこなすことを目的にするのではなく、人が人に何かを伝える、あるいは人と人とがつながり合うために文字が存在していることを自然に感じ取れるように環境を工夫し、

援助していくことが重要である」としている。

「内容の取扱い」(4)の解説には、「数量や文字に関する指導は、幼児の興味や関心から出発することが基本」となり、幼児が遊びや生活の中で、文字や数量を扱ったりする活動を積み重ねることにより「ごく自然に数量や文字にかかわる力は伸びていくものである」としている。また、幼児期における文字指導は、「文字を正確に読めたり、書けたりすることを目指すものではない」と示されている。その理由として、「個人差がなお大きいこと」や「習熟の用意が十分に整っているとは言い難いから」としている。あくまで習熟の指導に努めるのではなく、幼児が興味・関心を広げ、「文字にかかわる感覚を豊かにできるようにすること」を幼児期に大切にすべきだとしているといえる。

(2) 「言葉の獲得に関する領域『言葉』」

「言葉の獲得に関する領域『言葉』」の(3)には次の「ねらい」が示されている。

(3)日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

ここには、「文字」という文言は出てこないが、言葉の理解と、さらに「絵本や物語などに親しむ」ことを求めており、絵本や物語にある文字に触れ、親しむことを重視している。

さらに「言葉」の領域の「内容」及び「内容の取扱い」には次のようにある。

「内容」
 (10)日常生活の中で、**文字**などで伝える楽しさを味わう。
 「内容の取扱い」
 (4)幼児が日常生活の中で、**文字**などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、**文字**に対する興味や関心をもつようにすること。

ここでは、「文字」という文言が使われている。「文字」の扱いは「環境」の領域と同様に、文字に興味・

関心をもつことが大きなねらいとなっている。

「幼稚園教育要領解説」の「内容」(10)に関する解説には、「文字などの記号に関心を抱く幼児は、5歳児になるとある程度平仮名は読めるようになっていく」ことや「書くことはまだ難しく、自分なりの書き方であることが多い」ことを指摘しているが、直接的に文字の書き指導をするのではなく、「文字を使う喜びを味わうことができることを念頭においた指導をすることが大切である」としている。

「内容の取扱い」(4)において、文字について直接指導しないという幼稚園の文字指導に対する姿勢が示されている。さらに、「小学校以降において文字に関する系統的な指導が適切に行われることを保護者や小学校関係者にも理解されるようさらに働き掛けていくことが大切である」という記述がある。このことから、保護者や小学校関係者から幼稚園の文字指導について何らかの要求等があっても、直接は指導しないという立場が示されている。

これらのことから、幼稚園教育要領での文字指導の考え方は、幼児の文字に対する興味・関心を高め、文字を使用することによる伝える喜びや楽しさを味わうといったところに関わっていかうとするものであることがわかる。具体的な文字の指導においては、小学校に入学してからという内容をふまえたものになっている。

教諭は、幼児一人一人の文字にかかわる体験を見逃さず、きめ細かくかかわる必要性や、興味・関心の状況は個人差が大きいことに配慮してかかわることが大切であることを示しているが、具体的な文字の書き指導については言及されていない。

3. 文字指導の実態調査

(1) 研究方法

長崎市の幼稚園全49園（公立2園、国立大学法人1園、私立46園）の3歳児、4歳児、5歳児クラスの担任教諭を対象に、郵送法による文字の書きの指導に関する実態調査を行った。調査内容は、幼稚園の担任教諭15名に対して、文字の書き指導に関する予備調査を行ったところ、文字の指導の種類、指

導方法や指導上の問題点などについて回答が得られた。この結果を基に、大庭(1996)と巢立・和田(2014)を参考に文字の書き指導の調査票を作成した。調査内容は、①担任クラス、②指導の有無、③指導の種類、④指導方法、⑤指導上の問題点、⑥指導の困難点、⑦指導の改善点の7項目を設定した。調査期間は2014年8月下旬から9月上旬である。

分析方法としては、調査により得られたデータから基礎統計量(人数、比率)を求めて分析し、それらの結果を基に考察する。なお、今回は主に全体の傾向を検討するため、自由記述で得られた「その他」については、個別状況であるため特徴的な意見を紹介するにとどめ分析対象から除外した。

長崎市の幼稚園全49園のうち34園から回答が得られ、調査用紙の回収率は255部中142部で55.7%であった。ここで得られた調査用紙の142部を分析の対象とした。

(2) 調査結果

①文字の書き指導の有無

幼稚園での文字の書き指導の実態は、5歳児クラスが80.9%(42名中34名、以下34/42と記す)、4歳児クラスが56.4%(22/39)、3歳児クラスが29.0%(9/31)、縦割りクラスが93.3%(28/30)であった(表1)。

幼稚園の5歳児クラス、縦割りクラス(年齢が異なる幼児で構成されたクラスのこと)のほとんどで文字の書き指導を行っていることが確認できた。

表1 文字の書き指導

項目	5歳児		4歳児		3歳児		縦割り	
名/%	34	80.9	22	56.4	9	29.0	28	93.3
人数	42		39		31		30	

②文字の書き指導の種類

文字の書き指導を行っているクラスを対象に、書きの指導の種類について質問したところ、次のような結果となったので、全体の傾向を述べる。

5歳児クラスでは、「平仮名」が100.0%(34/34)、「カタカナ」が32.4%(11/34)、「その他」が20.6%(7/34)であった。

4歳児クラスでは、「平仮名」が95.5%(21/22)、「その他」が40.9%(9/22)、「カタカナ」が18.2%(4/22)であった。

3歳児クラスでは、「その他」が66.7%(6/9)、「平仮名」が55.6%(5/9)、「カタカナ」が33.3%(3/9)であった。

縦割りクラスでは、「平仮名」が96.4%(27/28)、「カタカナ」が35.7%(10/28)であった。

「その他」は、各クラス共通に数字の他、様々な種類の線をなぞったり、書いたりする内容であった。

これらのことから、幼稚園における文字の書き指導の種類に関しては、「平仮名」が圧倒的に高い比率を示していた。低い比率ではあるが、「カタカナ」の指導も行われていた。その他の項目では、数字や線書きが行われていた。(表2)。

表2 指導の種類を集計結果

項目		5歳児		4歳児		3歳児		縦割り	
平仮名	名/%	34	100.0	21	95.5	5	55.6	27	96.4
カタカナ	名/%	11	32.4	4	18.2	3	33.3	10	35.7
漢字	名/%	1	2.9	0	0.0	0	0.0	1	3.57
アルファベット	名/%	1	2.9	1	4.5	1	11.1	1	3.57
その他	名/%	7	20.6	9	40.9	6	66.7	2	7.14
n	名	34		22		9		28	

③文字の書き指導の方法

文字の書き指導を行っているクラスを対象に、書き指導の方法について質問したところ、次のような結果となったので、全体の傾向を述べる。

5歳児クラスでは「なぞり書き」が85.3%(29/34)と最も多く、次いで「筆順」が79.4%(27/34)、「手本文字の視写」が70.6%(24/34)となった。

4歳児クラスでは、「筆順」が81.8%(18/22)と最も多く、次いで「なぞり書き」が77.3%(17/22)、「市

販プリントの使用」が59.1% (13/22) となった。

3歳児クラスでは、「筆順」が100.0% (9/9) と最も多く、次いで「なぞり書き」が88.9% (8/9)、「手で空書き」が44.4% (4/9) となった。

縦割りクラスでは、「なぞり書き」が85.7% (24/28) と最も多く、次いで「筆順」が78.6% (22/28)、「ます目の利用」が67.9% (19/28) となった。

これらのことから、幼稚園における文字の書き指導の方法として、圧倒的に「なぞり書き」や「筆順」が高い比率で用いられていることがわかった(表3)。

表3 指導方法の集計結果

項目	名/%	5歳児		4歳児		3歳児		縦割り	
		名	%	名	%	名	%	名	%
筆順	名/%	27	79.4	18	81.8	9	100.0	22	78.6
手で空書き	名/%	15	44.1	10	45.5	4	44.4	4	14.3
なぞり書き	名/%	29	85.3	17	77.3	8	88.9	24	85.7
手本文字の視写	名/%	24	70.6	12	54.5	2	22.2	17	60.7
板書文字の視写	名/%	15	44.1	6	27.3	0	0.0	6	21.4
聴写	名/%	1	2.9	1	4.5	0	0.0	3	10.7
ます目の利用	名/%	20	58.8	11	50.0	0	0.0	19	67.9
音読指導の重視	名/%	5	14.7	2	9.1	0	0.0	2	7.1
五十音図の利用	名/%	12	35.3	3	13.6	0	0.0	19	67.9
市販プリントの使用	名/%	14	41.1	13	59.1	1	11.1	2	7.1
自作プリントの使用	名/%	15	44.1	11	50.0	2	22.2	4	14.3
その他	名/%	2	5.9	2	9.1	0	0.0	5	17.9
n	名	34		22		9		28	

④指導上の問題点

文字の書き指導を行っているクラスを対象に、実施している書き指導上の問題点について質問したところ、次のような結果となったので、全体の傾向を述べる。

5歳児クラスでは、「個人差が大きい」が76.5% (26/34) で最も多く、次いで「筆順に誤りがある」が64.7% (22/34)、「鉛筆の持ち方が悪い」が58.8% (20/34) となった。

4歳児クラスでは、「個人差が大きい」が90.9%

(20/22) と最も多く、次いで「鉛筆の持ち方が悪い」が68.2% (15/22)、「筆圧が不適切である」が63.6% (14/22) となった。

3歳児クラスでは、「個人差が大きい」が100.0% (9/9) と最も多く、次いで「鉛筆の持ち方が悪い」が77.8% (7/9) となった。

縦割りクラスでは、「個人差が大きい」が46.4% (13/28) であった。

これらのことから、幼稚園における文字の書き指導上の問題点として、「個人差が大きい」が高い比率となった。3歳児、4歳児、5歳児のクラスでは50%を超える比率で、幼児の「鉛筆の持ち方が悪い」を問題点として挙げていた(表4)。

表4 指導上の問題点

項目	名/%	5歳児		4歳児		3歳児		縦割り	
		名	%	名	%	名	%	名	%
文字に興味がない	名/%	9	26.5	9	40.9	1	11.1	5	17.9
模倣ができない	名/%	7	20.6	9	40.9	4	44.4	1	3.6
個人差が大きい	名/%	26	76.5	20	90.9	9	100.0	13	46.4
姿勢が悪い	名/%	9	26.5	8	36.4	2	22.2	0	0.0
鉛筆の持ち方が悪い	名/%	20	58.8	15	68.2	7	77.8	4	14.3
左利きである	名/%	6	17.7	3	13.6	1	11.1	5	17.9
筆順に誤りがある	名/%	22	64.7	12	54.6	3	33.3	9	32.1
字形細部が不正確	名/%	9	26.5	5	22.7	2	22.2	0	0.0
筆圧が不適切	名/%	10	29.4	14	63.6	3	33.3	2	7.1
鏡文字になる	名/%	12	35.3	9	40.9	1	11.1	7	25.0
その他	名/%	2	5.9	5	22.7	1	11.1	0	0.0
n	名	34		22		9		28	

⑤指導の困難点

文字の書き指導を行っているクラスを対象に、実施している書き指導の困難点について質問したところ、次のような記述がみられたので、全体の傾向を述べる。

5歳児、4歳児、3歳児、縦割りクラスに共通して、「指導のための時間が少ない」、「指導のための時間確保が難しい」という意見がみられた。

これらのことから、幼稚園での文字の書き指導の

困難点として、「指導のための時間確保」に苦慮している教諭の姿がみえてきた。

⑥指導の改善点

文字の書き指導を行っているクラスを対象に、実施している書きの指導の改善点について質問したところ、次のような記述がみられたので、全体の傾向を述べる。

5歳児クラスでは、「個々のペースに合わせて指導すること」、4歳児クラスでは「一人一人に合った言葉かけや配慮、指導」、3歳児クラスでは、「文字への興味をもてるような言葉かけや保育環境の設定」、縦割りクラスでは、「文字に親しみを持つことができるような導入の工夫」という意見がみられた。

これらのことから、集団における指導の中でも一人一人に目を向け、文字に親しみ、興味をもって取り組めるように言葉掛けや指導、環境設定をしていきたいという教諭の考えを知ることができた。

(3) 考察

本研究では、現行の幼稚園教育要領における文字の取り扱いについてふれ、幼稚園を対象に文字の書き指導の種類や指導上の問題点、改善点についての教諭の意見や考えを調査した。

現行の幼稚園教育要領での文字指導の考え方は、幼児の文字に対する興味・関心を高め、文字を使用することによる伝える喜びや楽しさを味わうことを重視している。具体的な文字指導は、小学校入学以降に行われ、幼児期には文字を正確に読めたり書けたりすることを目指すものではないとしている。その理由として、個人差が大きいことや習熟の用意が十分に整っていないことを挙げている。

ところが、長崎市の幼稚園を対象にした文字の書き指導の実施について集計した結果は、実際に5歳児を中心に文字指導が行われていることを示している。巢立・和田(2014)は、小学校入学前の文字の書き指導の必要性についての意識調査において、保育園、幼稚園の保育者の多くが必要であると回答していることを報告している。本研究においても、文

字の書き指導が実際に行われていることを示しており、幼稚園教育要領の文字指導に関する考え方と実態にズレが生じているといえる。

文字の書き指導の種類に関しては、「平仮名」が圧倒的に高い比率で実施され、低い比率であるが「カタカナ」の指導についても行われていることが示された。これらのことは、巢立・和田(2014)が報告しているように、保育園、幼稚園で「平仮名」が高い水準で指導されていることと一致する。しかしながら、本研究においては「平仮名」に加えて、若干ではあるが5歳児クラスでは「カタカナ」の指導が行われていることから文字指導の多様化と早期化の可能性が考えられた。

現行の幼稚園教育要領の解説には、幼児期における文字に関する指導は、「文字を正確に読めたり、書けたりすることを目指すものではない」と書かれている。しかし、今回の実態調査では、文字の書き指導の方法に関して、「なぞり書き」、「筆順」が高い比率で用いられていることが示され、幼児が文字を正確に書くことができるように指導していることが推測できる。

巢立・和田(2014)は指導の方法として、保育園、幼稚園では「筆記具の持ち方」や「正しい姿勢」を用いていると報告しているが、本研究においては、「なぞり書き」、「筆順」が指導の方法として多く用いられている。

これらのことをふまえると、文字を書くための準備として、筆記具の持ち方や正しい姿勢について指導するという内容だけではなく、実際に筆記具を使用して文字を書くことそのものの指導へと進んでいるとも考えられる。

幼稚園教育要領には、文字の書き指導の方法について言及されていない。このような文字指導の実態から、今後の幼稚園教育要領では、文字の書き指導の内容について具体的な検討がなされてもよいのではないと考える。

文字の書き指導上の問題点に関して、「個人差が大きい」が高い比率となり、5歳児、4歳児、3歳児のどのクラスにおいても「鉛筆の持ち方が悪い」

ことが共通の問題点として示された。これは幼児期の文字の書き指導においては、教諭の積極的な援助なしでは十分に習得できない幼児と、あまり指導を受けなくても習得できる幼児との間に大きな差が生じることと、鉛筆の持ち方については教諭の積極的な指導の必要性を示しているのではないかと考える。自由記述には、細部にまで目が行き届きにくいことが問題点としてあげられていた。この記述から、一人の教諭が集団で多数の幼児を相手に指導をしているため、個人差の大きい幼児一人一人の細部にまで目を行き届かせ、正しい鉛筆の持ち方や筆順の指導を行うことの難しさが推察される。

文字の書き指導の困難点に関して、「指導のための時間確保が難しい」が挙げられ、指導の改善点として、集団における指導の中でも一人一人に目を向け、幼児が文字に親しみ、興味をもって取り組めるように言葉かけや指導、保育環境の設定をしていきたいという考えが示された。

このことから、教諭が「個人差が大きい」幼児や「鉛筆の持ち方が悪い」幼児に対して、丁寧な関わりが必要であることを認識しているが、指導のための時間の確保が難しく、個別対応ができない現状を示していると思われる。

4. おわりに

幼稚園教育要領に具体的な記載がされていない文字の書き指導が、調査により回答が得られた長崎市の幼稚園では3歳児、4歳児、5歳児、縦割りのクラスで実施されていることがわかった。「平仮名」を書くための指導として、「なぞり書き」、「筆順」の指導が行われていた。指導上の問題点としては、「個人差が大きい」ことや「鉛筆の持ち方が悪い」こと、教諭が「指導時間がない」ことに苦慮していることもわかった。

このような実態を改善するために次のことを提案したい。文字の読み書きや鉛筆を持つことに興味を示し始めた時から教諭自身が望ましい鉛筆の持ち方を示し、正しい字形で文字を書き示す。これは大切な文字環境である。鉛筆を持って文字を書く前の導

入段階として、手で物を操作したり、自由に大きく描画したり、線結び、波線や円形などを書いたり、色塗りをしたりする活動を十分に経験させる。このことにより、線や形の認識力が高まり、肩、腕、手首の運動から手先の操作の微細運動へと発達を促し、形を認識して文字を読んだり、運動を調整して文字を書いたりすることが可能となる。

教諭の人的な課題については、幼稚園で一人の担任が集団で幼児達の文字指導をするには、時間的に限界がある。この現状を改善するためには、教諭の人数を増やすなどして一人一人に目を向けた細やかな指導ができるような体制づくりが必要になるであろう。

幼児期の文字の書き指導においては、詰込み指導や文字への興味・関心のない幼児への無理な指導は、避けなくてはならないが、文字に対する幼児の自発的な求めに適切に対応するためには、教諭が系統的な文字指導の視点を持つ必要がある。その視点をふまえて、幼児期から形の認識、姿勢、手の使い方、鉛筆の持ち方、筆順などに配慮した指導を行うことで、文字の書き指導は可能となり、円滑な小学校への移行も可能になるであろう。

今回の研究では、現在、行われている幼稚園での文字の書き指導に関する実態と、現行の幼稚園教育要領の文字指導の考え方とを比較しながら検討を行ったが、幼稚園教育要領の歴史的な視点からの検討も必要であると考えられるので、この点については今後の課題としたい。

引用文献

- ・新井美保子（2013）幼保小における学びの接続の探求（その1）：文字への取り組みを中心に。愛知教育大学研究報告，62（教育科学編），pp.39-47.
- ・文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説。株式会社フレーベル館。
- ・大庭重治（1996）通常の学級に在籍する書字学習困難児の指導上の問題とその改善に関する調査研究。特殊教育学研究，33（4）pp.15-24.
- ・大庭重治（2003）就学前後の平仮名書字における字の発生とその変化。上越教育大学研究紀要，22（2），pp.

529-537.

- ・齋木久美・市原陽子（2007）幼稚園の文字指導における理論と背景：小学校への接続を踏まえて．茨城大学教育学部紀要（教育科学），56，pp.23-34.
- ・巢立早希・和田圭壮（2014）幼児期における文字指導に関する一考察：園における実態調査に基づいて．福岡教育大学紀要，63，5，pp.83-93.

謝辞

本研究の調査に快く協力して下さった長崎市幼稚園の園長はじめ先生方、調査結果の整理を手伝って下さった明星園の淵上紀恵さんに心から感謝申し上げます。

（おかもと あきひろ）東京未来大学